明倫AIR　アーカイブ（ヒアリング）
2010-2023

2024/12/22

髙木善祥

1.関連資料（ポスター、チラシほか）

2.川部洋氏へのインタビュー

3.仲倉幸俊氏、里田晴穂氏へのインタビュー

4.蛇谷りえ氏へのインタビュー

エネルギア文化・スポーツ財団助成事業
第2期明倫アーティスト・イン・レジデンス

天までとどけ！ メイリントーン音楽会

平成22年11月13日（土）

第1部　踊ってみよう！（13：30）未来中心
第2部　叩いてみよう！（13：30）長谷の西坂広場
第3部　叩きまくれ！　（15：00）研屋町後援
　　踊りまくれ！

■参加費無料■

BARON（バロン）ボードビルワークショップ

ボードビルを体験してみませんか

2014/10/10（金）19:00 - 20:30
10/11（土）14:00 - 15:30

明倫AIR2018

町村連携事業　ギャラリートーク

となりの富三郎

～生活とともにある芸術～

明倫AIR2018招聘アーティストの久保田沙耶が社会学者の渡邊太、キュレーターの岡田有美子を交え、郷土作家としての長谷川富三郎を現代的視点から見直し、まちなかで見られる長谷川作品の紹介や日常生活に馴染んだ芸術作品のあり方について語る。

出演者：久保田沙耶（芸術家）
　　渡邊　太　（鳥取短期大学教員）
　　岡田有美子（キュレーター）

日　時：2019年2月10日（日）14時～ 入場無料・申込不要

場　所：倉吉博物館　第四展示室

明倫AIR2018倉吉博物館コピー展も開催中。（1/27～2/17）

連絡先　明倫AIR実行委員会　083-1926-5141（田島）

助　成：鳥取県芸術文化振興基金助成金、エネルギア文化・スポーツ財団

明倫AIR　倉吉初のアーティスト・イン・レジデンス

2010
中村絵美

2011
三家俊彦

2012
Franck Bragigand
椎名勇仁

2013
Cherry Tyhoon

2014
CherryTyhoon
BARON
竹ち代毬也

2015
大野隆介

2016
永本冬森

2017
中村恵美
久保田沙耶

2018
久保田沙耶

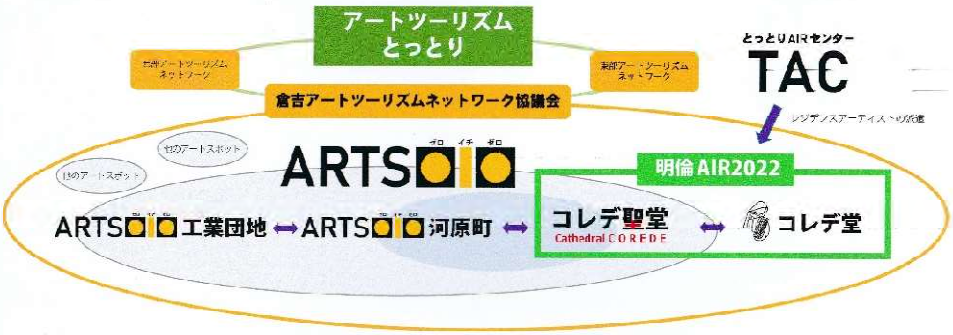
2019
久保田沙耶
9/3～9/28

2020
久保田沙耶

2021
久保田沙耶

明倫AIR2022　久保田沙耶５年継続レジデンスの最終年

いろいろなことが絡み合い　さまざまなことが動き出す



1.川部洋氏へのインタビュー

（2024/10/2　かわべ洋後援会事務所にて）

髙木：
そもそも発端としては、明倫小学校の保存が一番大きなきっかけなんですよね？

川部 ：
まだプレ（その前）があったりするんですけど、個人的には30歳の時にこっちに帰ってきて、倉吉まちづくり協議会というところに出入りして、まちづくり活動をいろいろ手伝ってきたんです。
そうした中で、まちのあり方というか、 イベントばかりやるんじゃなくて、街並みを保存したり、古い建物を生かしていこうという関心が出てくる。倉吉淀屋っていう建物がこの通りにあるんですね。

これは個人の所有だったんですけど、これが大阪の淀屋という豪商と関係がある建物で、倉吉の商家建築では最も古いという話だったんです。
ただ当時はボロボロで、所有者も解体したいなという話があったのを、それなんとか残せないかなっていうことで、牧田家っていう、 淀屋家再生プロジェクトっていうのをこの辺の我々より一世代上の人たちと一緒に立ち上げて始めた。
そこから建物保存に関心を持って、それで平成18年に倉吉市が所有して保存することが決まったと。
その次が円形校舎で、これも解体方針が出てしまってどうしようかというタイミングと、それから2009年が明倫小学校100周年なのもあって、それをうまく使いながら残していこうと。
小学校ができて明麟地区という地域名になったので、地域としても100周年記念事業をあそこでやろうという話になりました。
もともとここは倉吉っていう町の西側で、メインは東側の方、西北地区というところなんです。後で入ってきた人たちが町を作って職人と商人の町みたいな作りだった中で、100年経って保存活動をそこから始めた。
私がその頃鳥取大の大学院の社会人入学生で、地域学部地域学研究科に行っていて、野田先生とのご縁ができた。野田先生も地域の建物をアートで活かせないか調査をしている中でお話をした。
それから野田先生の伝手で、当時札幌にいた小田井真美さんを紹介してもらった。倉吉に小田井さんのおばあちゃんがおられるんですね。2009年が終わって2010年の正月だったと思うんですけど、円形校舎の中で3人で会って話をしてアーティストインレジデンスをやる話が決まったのを覚えてます。

髙木：
アーティストインレジデンスをやろうっていうのはどこから発想されたのですか？

川部：
野田先生が言われていた、「古い建物を活かしてアートとつなげることはできないか」というのがあって。
小田井さんはもうすでにレジデンスをやってた。僕はこれを保存するための方向性を探ってる中で、提案があったんでよくわかんないけどやりましょう！と。
全然その頃はアートがどうのこうの考えてもなかった。当時はアーティストインレジデンスとは何ぞや？それの何が面白いんだろう？とか、知識だけで言うと全然分かってなかったんだけど、まあやりましょうっていうことで決まったんです。

その年に、鳥取県では岩美で国際芸術祭っていうのをやってて、これもアーティストインレジデンスで県から補助金をもらってた。それから鳥の劇場さんもアーティストインレジデンスを鹿野でやっていて、僕らもそれを見に行って「こういうことか」と。予算的なものは、「自分のところの研究費や調査費があるので鳥取大学が出します」って野田先生も言ってたんです。
ただ、そうは言っても自分たちでも用意しないといけないので、県に制度を作るよう掛け合った。確立してる岩美や鹿野にお金出したって広がらないだろうから、他でもアーティストインレジデンスをやれる制度を作ってもらった。
そういう経緯があって、たぶんそれを使った一号だと思います。当時は2002年からやっていた市議会議員を辞めたぐらいで、NPO活動をしていろいろとありましてね。だから明倫地区の活性化という視点での円形校舎の活用保存というのが全体の中であって、地域の人たちといろいろ動いてた流れの中でNPOを立ち上げようってなった。
ちょうど並行して明倫ネクスト100っていうNPOを立ち上げたんですね。団体を立ち上げて活動ができて、さらに100年続く街づくりをしようということでNPOを立ち上げて、その中でこのアーティストインレジデンスをやろう っていう風にはなった。当初メンバーも「なんかよくわからない」と言っていたので、NPOの事業というより川部の事業として始めるので、皆さん協力してくださいとお願いした。

髙木：
第1回のアーティストインレジデンスやその時の立ち上げメンバーには、どういう方、何人くらいおられたのですか？

川部：
NPOを立ち上げるのには10人以上役員ほかがいないといけないので、立ち上げメンバーは大体14、5人くらいいたと思います。この小学校校区の活性化のためのNPOと決めてたので。
当時から高齢化率が一番高い地域で、街中なんですけど農村部より高齢化率が高かったんですよ。大学行って帰ってきても、やる仕事は公務員になるか先生になるか銀行員か、くらいで。
どっちかっていうとこの辺の人は、「大学行かせて外出て活躍しろ」みたいな流れが強かったので、世代が続かない。農村部はまだ農地があるので「出ても帰ってこよう「帰らなくちゃならない」という意識が強いんですけど、この辺の人はもう帰ってこなくていいからみたいな。

髙木：
私が今住んでるところは鳥取市の旧市街地なので、同じような状況です。自分は商売やってるけど子供さんは帰ってこず、住宅と一緒だから店舗だけ貸すこともできず、結局シャッター街になってしまう。

川部：
NPOはNPOで話せばまた1日ぐらい話ができるんですが。

髙木：
創立に関わったメンバーは今も継続している？

川部：
実はまたその辺話しだすと長いんですけど、NPOじゃ自立できないじゃないですか？

補助金も当時かなり取って、事務員も雇ったりしていましたけど、できるだけその資金的な自立を図りたいということで、街中で日本ミツバチを買って生業（なりわい）にしようっていう動きを作って、それでお酒を作って商売するっていうことを考えたんですね。明倫町づくり合同会社という、NPOのメンバーの一部で事業をやる団体を作ったんです。
そうこうしてるうちに私は県議会議員になり、円形校舎の保存も決まってメンバーが館長をやるし、いろんな動きもあった。
この事業も立ち上げからちょっとずっと赤字続きで、僕はもうほとんど補填してたような感じなので閉じてしまった。その辺からだんだんこのNPO活動もちょっと収縮していってしまったっていうのがあります。円形校舎の保存活動の中で、やっぱり地域が2つに大きく割れてしまったというのがあって。残そうという人と、壊しても別に問題ないという人もそれなりにいた。

髙木：
それは意外でした。

川部：
今でも若干その後遺症は残ると。 地域の人たちで、あそこのことを語らない人がいる。
成功事例として見えるんですけど、地元の人だったら意見の違いが人格否定とまでは言わないですけども、対立の構造を生んでしまった。

髙木：
ちょっと話がずれるかもしれませんが、その活動と川部さんが市議会や県議会で議員になることがどうつながっているのか、もしくはつながっていないのかを教えてください。

川部：
「川部は何をやりたいんだ？」と当時はよく言われました。関心がかなり広かったりするので。ただ僕は、「金を儲けたい」とか「 商売がしたい」という意識はあまりなくてですね。他人が喜んでくれたり、地域がこうなればいいなっていうそういう意識の方が強いタイプだと自分は思うんです。
帰ってきて街づくり活動してたっていうのをみんなと一緒にワイワイできたらいいなという中でどう? 今、倉吉パークスクエア、あの未来中心が、あれがちょうどそういう時期にできたんですよ。
で、あの時に私もなんかそこの活用促進の住民が集まった協議会みたいなのを作って、こんなことで使えるんじゃないかっていう検討して、実際にそれをプロジェクトにつなげていくみたいなメンバーに入ったんです。ただ本当にですね、市議会が自分たちの話を聞いてないみたいで、予算を執行止めたりだったりしたんですね。
で、何だこれって。こいつら邪魔だなぁっていう気がした。だから、まあ市議会議員になるっていう直にはならなかったんですけど、 ためになってないなっていう意識があっていつかは出ようという意識があったんですね。
2002年の正月に親戚で集まった時に、次の選挙に出ようと思うっていう宣言をしたんですよ。この期間に準備させてくれっていうようなことで、皆さんの了解を取った。
そうしたらちょうど2002年に市長選挙の選挙違反事件があって、市議会議員が25人中12人辞めて、補欠選挙になってしまった。7月にじゃあ出ますかみたいな感じで出て、なんとかブービーで当選した。
そこから政治に関わるようになった。一応法学部政治学科の卒業で、政治に全く興味がなかったわけではないけど、学生の頃は自分が議員になろうという気は持ってなかった。なんとなく誰かの役に立てればいいかと、それくらいの意識しかなかったんです。

けどそんなきっかけで議員になった。漠然とした議会や市政に対する不満を、自分なら変えられるんじゃないかという若気の至りみたいな感じですね。
だから保存活動したりいろんなことに首突っ込んであれしようこれしようと、僕はどんどんアイデア出して事業化していくんで、周りがついて来ないっていうところもあって何がやりたいかわからないってよく言われてたんです。
僕の中で全部つながってるんですよ、こういった活動は。だけど人から見るとすごくバラバラに見えるみたい。
「結局あなた何者なの？」とよく聞かれました。 人の生活の中でこの地域で暮らすっていうことがどういうことなのか、それから暮らしてきた歴史だとかいろんなものが積み上がっている中でどうつなげていくのか、っていうことの中に全てのことがあって、僕は性格的に目的意識を明確にしながら事業を作ろうとしていた。
そもそも明倫地区をどうするのか、という中で、じゃあこの建物を残していくことによって、この地域の歴史をつないでいきながら、次に何かできないかとかっていうような感じで、一個一個語る場面はあっても、自分の中では守備一貫したストーリーはあったんです。

髙木：
その明倫小学校の保存活動はどういう形で関わりを持っていたのですか？最初は譲渡という形になりますよね？

川部：
小学校が移転したのが昭和51年です。 で、それから中央公民館だとか団体の事務所としてずっと使われてきたんですけど、 耐震が色々問題になったのは阪神大震災の時で、建物の耐震の話が出て。次の使い道がないから、倉吉市はもう耐震診断もしないという立場。
もう壊すありきで、使い道がないだろう、直して使ったって金かかるから、と。
だけど、これってどういう建物なの？みたいなのを掘り起こしをして、 日本で3番目にできた円形校舎で、残ってる中では1番古いものなのに、なんでこれを活かさないんだっていう風に 思ってました。
地域の我々世代、多分昭和30年以降の世代にはすごく思い入れのある、あって当たり前の建物なので、あれがなくなった風景というのは想像できないだろうという思いもあってですね。
市になんとかできないかって言うんですけど、財政面があるからできないというので、 とりあえずこの建物の価値を知らしめようっていう風なことで、円形校舎とはなんぞやとかね、 実際に使いながら、色々そういう活動をして理解を促し、仲間を増やしていくっていうやり方しかないかなと、当時は思ってました。
市が決定すれば決まるんですけども、市はもう方針出しちゃうから変えないっていう。

髙木：
それをひっくり返すのもかなり大変でした？

川部：
はい、大変でした。大変だけども、当時の市長はあの場所を使うことに対してはすごく緩くて、ずっと鍵借りてたんですよ。 勝手に使ってた。僕の家みたいな使ってたので、アーティストインレジデンスもやりましたし。
あそこをバースデーケーキ化（円形校舎をケーキに見立てて飾り付けるイベント）、これも100周年の時にやって、何年か継続した。とにかくあそこを使い倒してやろうっていう。 そうやって、建物の価値が少しずつ浸透していってっていう流れなんですね。
色々建築学会にも働きかけたり、ドコモモも選んでくれたんですけど、ドコモモにも働きかけたり、いろんな形で なんとか保存する方法がないか。要は資金なんですよね。使い道と、どうしたらいいんだろうっていうのはずっと足掻いてましたね。
（ https://docomomojapan.com/ ）

髙木：
じゃあそのお金の面だとか誰にだとか、使い方も含めて川部さんがが色々動かれていた？

川部：
僕だけじゃないですけど、本当にひっくり返ったっていうところは、理解してくださる人が多かったっていうところもあります。 半分が対立したっていうのは、僕のやり方にやっぱりアンチがあって、円形校舎を残したい／ 壊したいというより、川部がやってるから（反対）みたいな。

髙木:
狭い地域だとそういうのはどうしても出てきちゃいますよね。

川部：
出てきちゃいますね。だから、 最終的に市はもう自分で持たないって言ってる中で、何をしようかというのを今の館長とも話をして。で、フィギュアミュージアムにするっていうアイデアは、 今の館長が出した。
あれはきっかけはなんだったかな。海洋堂との付き合いはどっちが先だったか…
そうだ、 博物館で海洋堂展をやったのかな。なんかそんなきっかけかな。 いや、ミニチュアドール展、ドールハウス展をやったんだ。
その時の繋がりで、海洋堂の社長に繋がる人脈ができて 稲嶋館長が フィギュアでなんかできないかなみたいな。僕が蜂蜜工場しましょうよとかって、あそこ、巨大な巣箱にして蜂を飼いましょうとか色々言ってたんですけど。
で、たまたま海洋堂の社長と繋がって、海洋堂の社長が 見に来た時に、あ、この建物おもろいやん。で、うちと、それから、当時もうあれが出るのがわかってて、 でグッスマ（グッズスマイルカンパニー）がこっちに工場進出するのがわかってて。ガイナックスの
赤井さんも米子でやってるし、この3社が組んでフィギュアミュージアムとしてやったらおもろいやんっていう話があって。
でも、これも大変でしたけどね。グッスマは全然そんな潰れそうな建物に金出す気ない、協力しないって言ってるし。で、反対派の活動の方にテコ入れしたりするんで、僕はもう社長に電話して、ここの倉吉の担当なんとかしてほしいって言ったら、隣にいますが変わりますか？って言われて変わられて、ありゃやっちゃった。

髙木：
じゃあ海洋堂さんが主軸になって動かれた？

川部：
かなり協力してもらいましたね。 表向きはグッスマとのいい関係みたいなの見えるんですけど、グッスマはあくまで県と市が 工場誘致したっていう流れで。海洋堂とグッスマが仲いいかっていうと、同じ業界にいるんだけど、全く仕事のベクトルが違う。
海洋堂は好きなもん俺たち作るんだ！ みたいな職人魂というか、 売れる売れないは二の次だみたいな。それがたまたま当たっちゃったっていう。チョコエッグとか。
グッスマは売れるものしかやらないので、もう完全に商売。

髙木：
でも、やっぱりフィギュアミュージアムを思いついたのはすごいなと。先見の明やタイミングも色々あったんでしょうけど、

川部：
でも本当に大変でした。もう何度これダメだなって思ったことか。 市議会でも真っ二つだったんですよ。誰かをこっちに呼ばないとひっくりかねないとか、そういうレベルだったし、 壊せ派は早く壊すように予算つけろ、で。

髙木：
フィギュアミュージアムに作り変えますって言われて、オッケーってそうはいかないですしね。

川部：
お金どうすんだ？でしょ。中心市街地活性化計画っていうのをやらせて、その中に入れさせるとかね。かなり回りくどいやり方をして。でもこれもギリギリになった時に、円形校舎を計画から外すみたいなことをしやがって。
実はそこに入ってたコンサルから裏情報聞いて。またちょっと焚きつけて、こんな話があるんだって言って、それをなんとか突っ込んだんですけど。本当にもうギリギリでした。

髙木：
やっぱり外から見ても全然わかんないですね。

川部：
だからこそ、やっぱり未だに後遺症が残ってますね。

髙木：
AIR（エア：アーティストインレジデンス）の方をちょっとお聞きしようと思うんですけども、 そのAIRの始まりが2010年7月1日で、明倫ネクスト100は、設立は8月20日。
さっきおっしゃってたように、同時進行でいろんなことが前後しながら、始められたっていうことですね。
で、その1期が、その中村絵美さんと、先ほどお名前出てきた小田井さん。中村絵美さん が第1回目のAIRとして選ばれた理由っていうのはどういう経緯でしょうか。

川部：
さっき言ったように、 3人で話して決めたって言ったじゃないですか。で、野田先生には、とりあえず学生スタッフも含めてAIRの運営面。それでプロデュース、ディレクションを小田井さんがやる。アーティストの選考も。
で、資金も鳥大がやるっていう中で、うちは地域の協力や連携の形を作ることで、住まいをどうするか、建物の話や発表会をするときにどこでやるか、調整するという役割分担。
さっき県の予算って言ったけど、それは翌年からだ。1回目は鳥大がやるって言ってたんですよ。で、 1期と2期でやって、とりあえず制作とそれから発表という形で分けるっていう ことだったんですけど、野田先生が後期分の予算がないって言い出して、「えー！」みたいな。

髙木： 32:20
トータルでいくらぐらいの予算感だったんですか？

川部： 32:23
我々は地域で協力するっていう立場なので、円形校舎を使うとか、こっちから地域のスタッフを出すとか、 住まいの用意をするとか、そういうことだったんで、予算感が全くない中で、前期でもうこれ予算が足りなくなるっていう話になって。
じゃあどうしようって言って、そん時は中国電力のエネルギア、文化スポーツ財団を取って後期予算にするという感じだったんです。
我々は本当にAIRってなんなの？中村絵美が来て何やってるかって言ったら、 なんだろう、天女の打吹のアレで、要は廃品を集めてきて楽器を作ってみんなで演奏するっていう作品を作るんだっていう話で、それがなんでアートなのかな？とかね。わかんないですよ。でも、とにかく円形校舎でずっと作業してるんで、みんなが色々こう出入りするし、その時に円形校舎とはこういうものだよみたいな紹介もするし、僕らも立看板作って今やってますとか、そんなことで地域巻き込むみたいな話して。
 最終的にその作品の制作発表を円形校舎でやってくれりゃいいんだけど、打吹山に上がる途中の広場でやっ

て、そっからパレードをして、 あの赤瓦のある公園のところで発表会をするって。円形校舎どこ行っちゃったんだろうって感じになって。

髙木: 34:21
それは当初は円形校舎でやる予定だった？

川部: 34:25
円形校舎は、もうとにかくそこでずっと制作をしてました。3月にもう1回、回顧展みたいなのをしたんですけど、NPOの方で。その時にいろんな写真飾ったりはしましたけどね。AIRというより、どっちかっていうとうちの活動でやったんかな。
保存のために始めたのに、なんかちょっと違う方向行っちゃったなみたいな感じはあったんですけど、 終わってからスタッフに聞いたら、なんかよくわからんかったけど面白かったよなっていう話になった。 来年もじゃあやってみるかっていう感じになって、NPOの事業としてはめ込んだ。

髙木:
特に1回目だと、そのやる側も当然手探りだと思いますけど、地域の皆さんの反応って最初はどんな感じでした？

川部:35:24
僕らもアーティストインレジデンスとかアートっていうものがどういうことをやるのかもよくわかんないし、本当にこれってアートなの？ぐらいに思ってたんですけど、 中村絵美という作家とお付き合いをしてるっていう感じで、その時は1ヶ月の滞在。合わせて2ヶ月ぐらいの滞在だったと思うんですけど、1ヶ月半かな。
割と交流会をしたりですね。あとに、とにかく作品制作の場はオープンで、 色々学生も入ってきたり、地域の人も入ってきたりで、地域のお囃子を復活させるみたいなプロジェクトもそこに入れたりしたんで、 いろんな人の関わりを作るような動きに持っていったんです。
割と温かく地域の人も見守ってくれてたんじゃないかなと思います。中村絵美というアーティストも良かったですし、 小田井さんがそういう仕掛けをしてくれたっていうのもあるかな。小田井さん自身もどっちかっていうと天神山でやってるようなアーティスト、こうポンと置いて作品制作っていうところで、地域との関係っていうところはあんまり。今やってる天神山のレジデンスなんか、 そこが主じゃないじゃないですか。明倫はどっちかというと、我々としては地域の人の繋がりの方が強いので、そうじゃなければうちでやる意味ないよという感じで、小田井さんもこんなに地域の濃いレジデンスは初めてです、と。

髙木:37:12
小田井さんにとっても発見というか、経験としてはすごく面白いものだったんですね。

川部:37:17
それをレジデンスと言っていいのかどうなのかっていう位置付けはあると思うんですけど、明倫AIRってそんなもんじゃないかっていう風には見てくれてると思います。
髙木: 37:28

じゃあ、小田井さんが中村絵美さんを連れてきたんですよね？

川部: 37:32
そう、北海道に行った時なんで。

髙木: 37:38
そういう仕掛けなんかは、小田井さんと川部さんも一緒になって、色々とやったということですか？

川部：37:44
基本的なところは中村絵美と小田井さんが決めていく。それを我々が受けて、じゃあどこと繋いだらいいんだろうとか、 どこの場所がよいか、リクエストがあったらこんな場所あるよとか。そういう提案をして、我々がそこの調整をするっていう感じ。
当時は、住むところもなかったんです。一応賃貸の空き家があったんで、そこを借りたんです。不動産屋と交渉して、この期間だけ貸してくれと。エアコンもなくて。
もうかなり参ってました。途中でウィンドウクーラー一つけたりしましたけど、 我々もそこにお金かけれないしなっていうところがあって、いい経験をした。
最初はホームステイできないかみたいなのも話してたけど、そういうわけにもならんだろうっていうことで。で、中村絵美ももう北海道から来ていて。
あの時もかなり暑い夏だったんで、もう茹で上がってましたね。で、円形校舎行くと、一応エアコンが残ってて。臭かったんですけど、エアコンは効いていたし、小田井さんのおばあちゃんの家もまだ地震前で使えたので、そこに避難したりと色々手探りだったんです。最初はパワーがありましたしね。我々も立ち上げの頃なので。

髙木：39:37
じゃあ1回目から、何かしら手応えのは皆さん地域の人も含めて感じました？

川部：39:43
よくわからないけど面白かった。

髙木：39:46
そこ重要ですよね。最初から全部わかってやってたら逆におもしろくないかもしれないですね。
川部さんの中で、ある程度受け入れられる見通しはありましたか？

川部：40:08
そうですね。だからアートっていうところではわかんなかったですけど、 アーティストを地域が受け入れるというプロジェクトなんだろうなっていう理解の 中で、ずっと小田井さんから言われてたのは、アーティストってやっぱり他の人と考え方、見方が違ったりするので、そこで地域の新たな発見になったりするし、我々が常識だと思ってるものを、彼ら彼女らはそれをまた疑うっていうこともするので、そういう異質な考え方を地域が受け入れるっていうこともメリットはあるなって。
もう本当に何をどうするのか全然わかんないですから。予定調和じゃない、もう出たとこ勝負。で、我々も勝負なんですよ。それをどうやって受け入れるのかっていう、これ面白いよなって思って。

髙木： 41:07
始める以上は当然受け入れないといけないんでね。じゃあこっちがどうするかと、問われ続けてるわけですからね。

川部： 41:17
だから行政ではできないなと思いますね。 だから予算は、これこれこういう項目で、こういうものに使うからいくら欲しいみたいな積み上げでやるじゃないですか。
AIRだと枠で取らないと、何がどう出てくるのかわかんないですね。

（＊これ以降は別途資料および音声データにて）

2.仲倉幸俊氏、里田晴穂氏へのインタビュー

（2024/11/20　仲倉食料品店にて）

髙木： 10:05
少し前に川部さんにお話を聞かせていただいて、一通り明倫AIRが始まる前から一番最近のところまでお話をうかがいました。関わりの深いお二人に違う視点でまたお話を聞かせてもらえたらと思います。

里田：10:27
変わるもんなんですかね。

仲倉： 10:29
わかんない。

髙木：10:44
明倫AIRが始まる前の、明倫小学校の円形校舎の保存活動がきっかけということですよね。

里田： 11:00
その頃は僕は全然（関わっていない）。元々は僕、上井の人間なんで、明倫小学校とはほぼ関係はないんですけれども、ネタですけど、明倫音頭の復活させて、公民館祭りで子供たちが歌うDVDが存在するんですけど、その1番最後のエンドロールで、妻のブログの記事がダーッと載ってたみたいです。

仲倉：11:41
おお、やっぱり縁があったんだ。

里田：11:45
妻のおじいさんが、明倫音頭の作曲者なんです。100周年の時に、復活させたんです。

仲倉：11:58
そうですよね、僕も明倫小学校の卒業生なので、 円形校舎があっての音頭ですよね。これがハーモニカの建物の前で丸いとか校舎がとか言ってもなにそれって話なんだけど、円形校舎がある頃に、昭和56年までやったんかな。そこまでは 1年のどのタイミングの行事なのかわかんないけど、子供たちが歌って踊るわけですよ。

里田： 12:44
丸い校舎を大きな輪でかこみ、とか長谷の仁王さんがおりてくる、とか。

仲倉： 12:55
そういうのもそうあったんだけども、校舎が移転することになってい、 それで、空き校舎になって、いろんな団体が、 耐震化だとか、50年経っちゃって安全な建物かどうかみたいなね、

里田： 13:21

その辺のことは多分ヤシマさん(？)が1番詳しいですね。

髙木: 13:30
時系列で大まかな流れを聞かせてもらいたいんですが、2010年に明倫ネクスト100っていうのが設立されて、その時にはもうお2人は関わられてたんですか？、

仲倉:13:51
僕はもう最初から関わってますから、100周年も関わってるので。もうこれのいきさつもね。

里田:14:03
記事を追うくらいかな、僕は。外部の人入れないんで。議決権がないんですよ。

仲倉:14:19
次の100年まで続くような地域づくりをっていうところでのネーミングですよね。

髙木: 14:33
仲倉さんはもうこの時からずっと関わっていて、この設立にも関わられていると。

仲倉:14:40
はい。で、その分の川部さんからも話してね。

(中断)

仲倉:15:03
今さっき通りかかったのが1番最初の真美さん。 第1回のAIRのアートプロデューサーをしてもらった小田井真美さん。第1回で紹介してくれて、我々にAIRというのはこういったものなんだよと。

里田 15:34
北海道の方にアートスタジオがあって。

仲倉:15:37
で、これが第1回になりました。それで、(資料を見ながら)これの裏のところにアドバイザー、アートプロデューサーで、小田井真美と名前が入ってるね。

里田: 15:54
茨城のアーカスやっとられて。 鳥取大の竹内先生が茨城の県の職員さんだったから、その辺は多分詳しい。文化政策関連で仕事をされてたんじゃないかな。

髙木:16:25
AIRをしようと思ったきっかけは？

仲倉：16:33
小田井さんは おばあちゃんの実家、この明倫地区なんです。芸術で地域をこういった目的で活性化させるのはあり得るのかな、みたいな。
そういうのもあって、AIRっていうものは地域活性化、あるいは外部の人がやってきて、新しい気づきのきっかけになると、地域の人もなんでもないところにもう1回再認識してくれるきっかけになるんじゃないかと。誰が言い出したっていうよりも、小田井さん。

里田 17:53
川部さんが言い出したのかな。＊＊＊＊さんへのアプローチもずっとしてたんですよね。

仲倉：18:25
そういう格好で、じゃあAIRってなんだみたいなところで。ちょうど100周年でもあるし、それで招聘するのに 補助金等もいるし、そうなってくるとNPOを発足した方がいいんじゃないか、受け皿としての組織がいるよねって。 そういう流れです。

里田： 18:57
今でこそね、県からの補助金はそういったものを作らなくてももらえますけど。

髙木： 19:21
それまではお2人は芸術とかアートに関する活動みたいなのはされてましたか？

仲倉：
まったく無関係。

里田： 19:30
そもそも僕はこの時点ではまだ参加してないので。
この辺の時もウロウロはしてるんですけど、建設課だったのでフランクの時に水道局にいてペンキ塗ったりとか。建設課の時って災害があると忙しくなるじゃないですか。それで、なんか合わなかったところがあって。で水道局行って羽を伸ばして、 その切れ目から新しいことしようかなっていうことで。転機だったのがフランクの年。

仲倉：20:30
12年ですね。それで、やっぱり地域の人を巻き込んでっていう話になると、やり方としては、地域の人が参加して成立する芸術作品みたいな格好になっていくのが1番参加しやすいんだろうな、みたいなのがもう当然あるんで。

髙木：21:03
フランクさんと椎名さんが2012年7月、8月からですね。

里田 21:11
（？）さんの写真がいくつか載っていると思って。絵美ちゃんのがないんですよ。そもそも当時会ってない。

仲倉：21:27
当時のね、新聞あたりはこんなんだとか。それで、今髙木さんがコピーしてもらってたのがこれですよね。

髙木： 22:13
実際にAIRをやってみて地域の皆さんの反応はどうでしたか？

仲倉：22:24
ありますね。やっぱり1番あるのは、難しいのが芸術家を招聘するにあたって、何を目的にするのかっていうところですね。。地域を巻き込むのか、作品に主眼を置いて、表に出ないでアトリエを提供するからって言って、黙々と作って。それでいい作品ができたみたいな。それがいいって言う人もいる。
目的として活性化っていうのであれば、いろんな人が関わって参加型にして、最後に作品の制作発表あたりで、地域の人も集まって、お祭り的なものがいいんじゃないかとかね。 主催する団体がどんな考え方をするのか。手段だから。

里田：23:44
手段が目的になっていないか。

仲倉：23:47
そういうこと。その辺のジレンマもあったり。そうなってくるとね。というところから、最終的にプロジェクトの中に、その2012年に、 フランク・ブラギガンドというフランス人がやってきた。ペインターなんで、 いろんなものに塗っていく。
錆びちゃっている遊具にカラフルな色で楽しい空間を作りたいと言ってるけど、勝手に塗っちゃまずいよなと思って。それで市役所に行くわけです。そっから俺（里田さん）がやるって。

里田： 26:41
いや、別にみんなで塗るからね、塗ろうかぐらいの。 娘さんと一緒に。あの頃は。でも蛇谷さんがおられたんで。椎名さんの時も岡山のハレノワやってくれてたし。1回目の時は小田井さんがね。放置プレーだったらしいですけど。

里田： 32:48
今、招聘アーティストだった久保田沙耶さんの展示をしていて、 12月14日にトークイベントがあります。今から会いに行く岡田さんの旦那さんの渡邊さんと話することになってます。岡田さんと中村絵美さんが学校の先輩後輩くらいで、そういったつながりもあります。
前の仕事を退職することになって仕事探してる時に、川部さんがこういった仕事あるよと声かけした。

（＊これ以降は別途資料および音声データにて）

3.蛇谷理恵氏へのインタビュー

（2024/12/19　たみにて）

髙木 00:10
明倫AIRに関わるきっかけは、どういうとこからだったんでしょうか？

蛇谷 00:15
はい、何やったっけ。その頃、たみを作ってたんですよ。まだ工事中やって。

髙木 00:25
2012年の。

蛇谷 00:27
はい、そうですね。フランクと椎名さんの時です。あと、チェリーさんの時も。
このさき計画っていう県の事業が、文化政策が始まった時に、別府プロジェクトの林くん が、ディレクターっていうかアドバイスみたいな感じで、鳥取県の側にいたんですよ。で、明倫AIRは元々始めてはいたんですけど、ディレクターを立てて、AIRをやった方がいいんじゃないかっていう林さんのアドバイスもあり。
明倫の人たちじゃない、外部のディレクターとして、自分が近所に住んでるっていうのもあり、まだたみを作ってる最中で、仕事ができる余裕もあったから、 蛇谷さん、やりませんかって声がかかって、仕事として受けました。

髙木 01:50
それまでに、何年かやってるのは見てはおられた？

蛇谷 01:55
いや、全然知らなくて。私たちが（鳥取に）来たのが、2011年の冬なんで。

髙木 02:13
仕事としてオファーを受けて、その中でフランクさんに声をかけたっていうのは、どういうところから？

蛇谷 02:22
その選定も、別府プロジェクトの 文脈っていうかネットワークで、林さんが、明倫だったらフランクと椎名さんがいいんじゃないかと提案があって。自分は全然、フランクも椎名さんもその時初めてです。
それで、もう本当に（仕事を）受けるっていう感じです。

髙木 02:47
では具体的に、ディレクター的な立場として関わった中で、フランクさんの時はどういう風な動きをされたのですか？

蛇谷 02:57
フランクが来て、アテンドして一緒にリサーチについて回って、展覧会 にするまでの制作を、人手がここでいるってなったら、人集めたり。あと、チラシ作って 宣伝広報活動したりと全般をしてました。

髙木 03:27
ここで、関わり始めて、たみを作ってる最中で、倉吉市内の方に関わり始めたのは、それがきっかけ？

蛇谷 03:44
そうですね。明倫地区は特に何も知らなくて。旧市街地の夜長茶廊とかココロストアは当時あったんで、そこまでは行き来はしてたんですけど、明倫のエリアは行ったことなかったので、そういう意味では、これがきっかけでした。

髙木 04:07
じゃあ、実際関わり始めて、外から見て何か気づいたことはありましたか？

蛇谷 04:15
それは すごい”明倫愛”みたいなのがあるんだなって思いました。

髙木 04:29
元々のきっかけは、円形校舎の保存の活動から始まって、2010年に明倫ネクスト100っていうのができて、そこからエアがスタートでした。スタート地点として100周年があって、次の100年に向けて何をするかで、まちづくり的な意味合いも強かったと思うんです。じゃあその中で、アートがどういう位置付けなのかという議論があって、AIRを始めたっていうところかなというのが僕の理解です。
蛇谷さん自身も、まちづくり的な仕事というか、松崎でたみを始めたってところもあるとは思うんですけど、この時に、たみをやろうとしていることと、明倫地区で仕事をして受けたAIRのディレクションとの間に関係性はありますか？

蛇谷 05:39
いや、正直、さっき言ってたように、明倫AIRは受け仕事として関わったところがあって。とはいえ、明倫生まれの人とか、育った人たちが明倫AIRに関わってるのもあって、明倫にこだわりの ある方たちのコミュニティ、こういう人たちがいるんだ的な。
探偵気分というか第三者として眺めてるっていうところはありつつ、外部ディレクターとして関わってたのもあって、アーティストって、別に生まれが明倫でもないし、明倫のために何か作るっていうわけでもないじゃないですか。自分の研究対象があったり、叶えたい、ここに来たことで何か思いついた、イマジネーションみたいなものを、うん、実現するっていうのがアーティストの仕事だったりするから。
そこのギャップみたいなものを、自分がつじつま合わせるっていう。解決の仕方は特にしませんでしたけど、それぞれ他者同士（色々）あるよねっていう状態で、進めたりしてましたね。
フランクが言ってる、フランクも椎名さんもすごい大人っていうか、だいぶベテランだったんで、振る舞いがやっぱ上手で。そんなにオレオレせず、地域の人の意見も尊重しながらも、自分のやりたいことやるっていう、すごくずる賢いところも見れて、なるほどってなってました。

髙木 07:49
長年やっているだけのことはあるという。

蛇谷 07:54
そう、私はまだ10年前で若かったんで、いや、なんでそんな、皆さん若かったりしたんで、「 いや、地域のためのアートでしょ」みたいな、「地域に何か良くしてよ」みたいなことを普通におっしゃいます。すごくピュアな意見を言って、私にぶつけるんですけど、いやいや、それは作家に直接言ったとしても、 多分スッキリする答えは出ませんよ、そういう目的で来てないみたいなことを、アートの人みたいな感じで、割と対立は良かったなと思ってます。すごくいい議論だなと思っていて。

髙木 08:41
「街づくりのため」とか「街の活性化のために」ということでアーティストとして来てないですよね。

蛇谷 08:50
そうですね。それはそちらの、それをどうするか、アーティストが見つけたいろんな何か出来事とか、生まれた繋がりを使って何をするかは、受け入れ側の引き続きできる課題やとは思うんですけど、なんか作家がそれをどうこうする、最後まで何かするっていうのはないんじゃないですかね。
みたいな感じで、割と地域の人とかアートの人みたいな感じで、こう くくられて喋っているのを思い出しました。

髙木 09:30
蛇谷さんはその仲介役？

蛇谷 09:33
そうですね、割と自分は翻訳というか、 アーティストも不快にさせたくないし、ちゃんとのびのび作品作ってほしいし、 とはいえそういうニーズもあるみたいなところの落としどころ。

髙木 09:52
地域の皆さんから、そういう風なことを言われた時に、例えばフランクさんにそれをどう伝えた？

蛇谷 09:59
いや、言ってなかったり、言っても仕方がない問題だったりもするなって思うので、 言ってたり、それは頑張って直接言ってみてくださいとか言ってみたり。その伝言ゲームが狂ってしまうんで、っていう感じで。結構、チェリーの時がすごくバチバチでしたね。

髙木 10:22
またちょっと毛並みが違うタイプなので、いろんな議論があってトラブルも結構あったと聞いています。

蛇谷 10:31
そうですね。フランクはフランス人っていうのもあって、英語でそんなに深く話しきれない部分もあった。でもフランクも大人なんでかなり滞在制作に慣れっこでした。なのですごく楽しんで 作品作ったりしてくれてて、限られた中で。椎名さんも揉めないように、うまいこと、やっぱり交流慣れしてるというか。

髙木 11:06
椎名さんの時も同じようにディレクターとしての関わり。

蛇谷 11:11
そうです。この時、時期が一緒なんです。年が一緒で。何か月かずらしただけ。ちょっと被らせたんかな滞在は。で、チェリータイフーンの時は公募にしたんですよ。
色々ここで結構大揉めしたんですよ、この椎名さんとフランクの回で。アートが何をしてくれるんだみたいな。終わった後も最中も、外部ディレクターに全部任せますみたいな態度されて、お金もらってんでしょ、 全部やんなよみたいな感じで。いやいや、全部できひんから私がいるしっていう。一緒にやりましょうよみたいな。
それが、これは地域に何が関係してんのみたいな。外部の別府プロジェクトだったり、この県のお金がどんって入っちゃった故、 皆さんもこれまでやってきたスタンスとちょっと違っちゃったんですよね。自分が入ったことで。
それで、え、どういうことですかって、私も若いから結構ちゃんと聞くみたいな感じで、この選定だって俺たちは選んでないとか、責任がこっちにあるみたいになっちゃって。

髙木 12:59
それは、終わった後に明倫側の人たちから？

蛇谷 13:03
そうそう。で、いやそういうんやったら、みんなで決めましょうって言って公募にして、今までのアーティストたちに推薦してもらって。何組か集めて、ポートフォリオを見て、そこから自分らで選びましょうと。それ、審査委員会を作ったんです。明倫AIRのおっちゃんたちと。

蛇谷 13:27
それで 俺たちはアートのことわかんないから、アートの人たちが選んで、俺たちはそれをやるわみたいな体制だったんですけど、「いや、わからんとかもう言わさへんぞ」と思って、 もうやってきてるんだからって審査委員会作った。みんなでアーティストのポートフォリオを見て。みんな（ジャンルは）バラバラなんですけど。
でも、関わったアーティストたちやから、明倫はこういう傾向があるから、こういう作家がいいんじゃないかって考えて推薦してくれて、結構全員良かったんですよ。
で、あとはおっちゃんたちと、誰が来たらどういうことが起きるかという、その考え方も全部伝えた。それで、おっちゃんたちはどれがいいですかと投げて、選んだのがチェリー。

髙木 14:21
チェリーさんが選ばれた理由は？

蛇谷 14:24
今までが作品だったんですよね。 で、チェリーが身体表現パフォーマンス系なので、それを見てみたいっていうのがちょっと大きかったと思います。
あとはジェンダー的な関心もチェリーは振れてたりしたので、そういう意味でも今までとちょっと違う毛色になっていいんじゃないかと。

（＊これ以降は別途資料および音声データにて）